

第224回くらしの植物苑観察会 2017年11月25日(土)

菊花壇しつらえのいろいろ

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

江戸時代後期に定着した市松障子 2020年東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムのモチーフに使われている市松文様は、江戸時代後期には、菊花壇に必須の装置になった。雨除障子の記録は18世紀に既に登場するが、文献上で藍色と白の市松障子の開始時期に触れたものは見つかっていない。文政2年(1819)に原本が成立した『菊経玉手箱』には、紺の土佐紙を用いるとよいと記され、このことから19世紀になって市松文様が流行したと考えられる。

「田安家邸園図」
(国立国会図書館蔵)
の一場面では、市松障子を有す菊花壇が三方に描かれる。屋根をかたびきし片庇ではなく両妻にしており、通常の花壇より手を掛け、さらに紅白の幔幕、明かり取り



りのための灯籠など、豪華なしつらえである。花壇を見物するための赤い毛氈を敷いた露台や座敷も描かれている。大名家のこうしたしつらえが、植木屋の菊花壇に影響を与えたと考えられる。

嘉永元年(1848)「きくの番附」(本館蔵)は、菊花をもって人物・鳥獣・物語などを形作った菊細工の番付であるが、富士山や月にウサギ、狸々などの菊細工ではなく、菊花壇だけを図示する植木屋が4軒認められる。ここには、雨除としての市松障子が必ず描かれており、菊花壇にはなくてはならない装置であった点が見える。

嘉永5年歌川国芳「江戸名所見立十二月之内 九月 巢鴨智恵内」(国立国会図書館蔵)は、富士山の菊細工により巢鴨の植木屋、斎田弥三郎の庭と目される。菊花は見えないが、市松障子のみ描かれている。勾配を付けず水平な屋根だが、おそらく菊花壇の上屋として用いたのであろう。
菊花壇の垣根 重陽の節句を祝うため武家の庭では菊花壇が作られ、この慣習が歌舞伎の舞台にも取り入れられ、さらに浮世絵にさまざまな菊花壇が描かれた。ここでは菊花壇の垣根「腰巻」に注目した。最初は表土を見せないため、後には秘蔵の菊の盗難防止のために作られた。

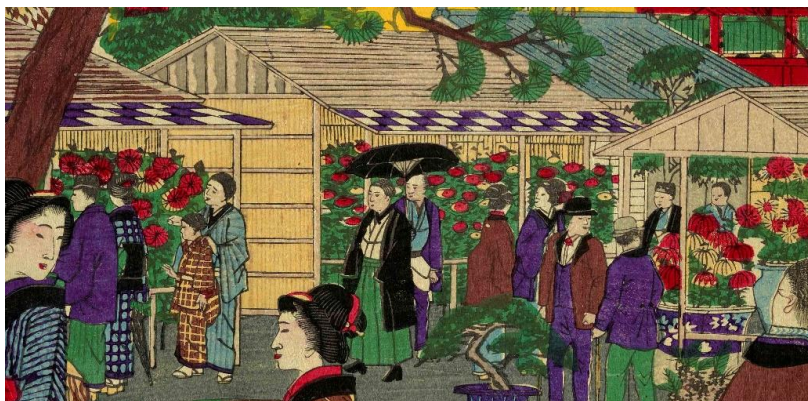
弘化4年(1847)～嘉永5年の歌川国貞(三代歌川豊国)「菊月」(国立国会図書館蔵)は、菊見に招待された女性の背後に菊花壇が描かれる。網代に組んだ垣根の向こうには、笹葉咲き、抱え咲き、盛上げ万重、捻れ菊、縷菊が咲き、下方に小菊が群れている。中央女性の左側、渦を巻く赤と黄の菊は「江戸菊」で、右上の赤い菊が咲き始めで、巴状になったのが完成形である。

文久元年(1861)の歌川国貞(三代歌川豊国)「坂東亀蔵の鬼一法眼、沢村田之助の皆鶴姫、市村羽左衛門の下部寅蔵、中村芝翫の下部ちえ内」(国立国会図書館蔵)は、歌舞伎「鬼一法眼三略巻」の有名な「菊畑」の場面であるが、背景に畑ではなく花壇をあしらっている。菊畑の場面は、浮世絵に複数描かれており、本図の大道具・垣根は、人が手を触れそうな位置に太い竹を廻し、腰

巻には、細竹を貼って、木材で頑丈に作っている。実用を重視したデザインである。

嘉永5年の歌川国貞（三代歌川豊国）「5代目市川海老蔵の佐藤与茂七、3代目嵐璃寛の師直召仕蘭の方、8代目市川団十郎の小的寺十内」（個人蔵）は「忠孝仮名書講釈」の一場面で、高師直の愛妾のお蘭の方が立ち寄った染井植木屋の庭である。垣根は、篠竹を縦に並べ、横に青竹を3本渡し、最上部は太竹を用いる。いかにも作り物の紅葉の枝が市松障子にかかる。抱え咲き、笹葉咲き、管咲きが咲き乱れ、時の人、師直の愛人を迎える場として、見事な菊花壇が演出されている。**形を変える市松障子** 江戸時代後期には、菊花壇の天井にきまって市松障子がしつらえられるようになっていったのが、明治時代以降は、さまざまな変化があらわれるようになった。

嘉永5年、見世物小屋が立ち並ぶ浅草奥山に花屋敷が開園した。日本最古の遊園地であるが、明治初期までは、植物園としてにぎわった。明治13年（1880）「東京名所年中行事 十月 奥山きくの花」（台東区立中央図書館蔵）は、菊花壇を覆う屋根は板葺で両妻、庇として市松障子を用いている。このまま観覧すると、菊花の鮮やかな色彩は暗くなり、奥にある花や曇天の際は、見づらくなると想像できる。



「東京名所年中行事 十月 奥山きくの花」部分

このまま観覧すると、菊花の鮮やかな色彩は暗くなり、奥にある花や曇天の際は、見づらくなると想像できる。

明治13年の月岡芳年「東京自慢十二月 七月 廓の燈籠 仲之街小とみ」（国立国会図書館蔵）は、吉原（現、東京都台東区千束）の年中行事で、毎年7月に行われていた「玉菊灯籠」の盛況を描く。江戸中期の遊女、玉菊の霊を慰めるために、趣向を凝らした灯籠を拵え、このときは一般人でも吉原に入ることができた。花壇ではないが、玉菊にちなみ灯籠の上に市松障子をしつらえている。

古写真「菊花壇 A Display of Chrysanthemums.」（本館蔵）は、江戸菊と丁子菊が同じ花壇に植えられている。天井は、市松ではなくて、通常の障子がのぞいている。現在の新宿御苑とよく似た花壇である。

昭和戦後期に制作された観光絵はがき「雷門より仲見世」（台東区立中央図書館蔵）は、雷門門前両側に懸崖などの菊花の植木鉢が並ぶ。天井部は開け放たれているが、市松障子のデザインが、柱などの骨組みに取り入れられている。

参考文献 国立歴史民俗博物館『伝統の古典菊』2015年

.....

次回予告 第225回くらしの植物苑観察会 2017年12月16日（土）

「サザンカの花色と花形」箱田 直紀（恵泉女子大学 名誉教授）

13:30~15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要